



賢者の転生実験

東国不動
TOUGOKU FUDOU

3

主な登場人物

Main Characters

ベルナー

驚異的な身体能力を持つ帝国の皇子。明るく豪快な性格で人を惹きつける。

ジャクリーヌ

農村出身の娘。学費のやりくりで苦労している。

アンナ

ネクロマンサーの女の子。無口だが行動力がある。

エマ

元娼婦(?)の女の子。魔導学院に入って成功を目指す。

ルナ

獣人の女の子。魔導学院では黒猫の姿で過ごしている。

レオ

大賢者ルドルフによって転生させられた少年。魔導学院の入学試験に失敗して最下位クラスに配属される。

ルドルフ

レオの父親。世間からは大賢者と呼ばれる。魔法犯罪者として指名手配されている。

マリー

レオの双子の妹。成績優秀で一年生の総代を務める。



プロローグ

無人の玉座ぎょせの前に、イグロス帝国の七魔将が一室に会していた。

イグロス帝国の七魔将と言えば、総数百万を超える帝国軍の中でもエリート中のエリート。超実力主義で選ばれた至高の七人とされている。

魔法による戦争が当たり前の世界では、文字通り一騎当千いっきとうせんの力を持っていた。

その彼らが一箇所に集結する機会は多くない。それぞれが一軍を率いて世界中を遠征していることが多いためだ。

だが、彼らが集まると決まって話題に上る話があった。

「やはり三万の将兵が一瞬にして殺られるなど、人間の力ではあり得ない」

「破壊の跡は残っているのだ。神の御業みわざではないだろう。誰かがやったんだ」

十年前、グマンの森付近で三万の帝国兵が一瞬にして殺された「裁きの日」の話だ。

七魔将同士は特段仲が悪いということもないが、お互いに功績を競う関係でもあるため、ともすれば腹の探り合いになる。

その点、裁きの日の話は、七魔将の誰もが興味を持っていて、当り障りさわのない話題として最適

だった。

もし、その三万の兵が七魔将いずれかの子飼いの部隊だったとしたら、彼らとて平静ではいられなかったに違いない。

しかし消えたのは、かつて攻め滅ぼした国、ローレアの遺民が主体の部隊——いわば使い捨て部隊だったので、七魔将達は犠牲者に対して何の感情も抱いてはいなかった。

今となっては、裁きの日の話は一種のミステリー。あまりに浮き世離れしているため、神話と化しているのだ。

文字通り、三万の将兵が消えた。敵に敗北したのかどうかすら分からない。船員が消えた幽霊船とか、忽然と消えた軍隊とか、そのレベルの話と同等だ。

七魔将達はそれぞれ裁きの日について独自に調査しているのだが、いずれも結論は「分からない」というものだった。

十数キロもの広範囲に展開された三万の軍隊を、一瞬にして一人残らず壊滅することが可能な方法など、至高の七人と讃えられている彼らすら持ち得ない。もし彼らの知らない方法が存在していたとしても、目撃者を一人残さず消すという所業は、人間業とは思えなかった。

「それにしても、陛下は遅いな。時間には厳しい方なのだが」

七魔将の中でも生真面目な女將軍、オフィーリアが苛立ちを露わにした。

帝国の第五軍を指揮しており、最も軍規が厳しいことで知られている。彼女の軍に所属する者は、

戦死よりも軍規違反の処刑で死ぬ確率の方が高いとも噂されていた。

もっとも、それは名誉半分、不名誉半分だ。

オフィーリアの第五軍は日頃の厳しい軍事訓練によって、戦場では非常に優れた集団行動を見せる。そのため、他と比べて兵士の死傷率が極端に少ないのだ。

「陛下はいらっしゃらない」

鈴の音のように軽やかな声が、空の玉座の間に響いた。

裁きの日より後に魔将になった新参者、ソシンの声だ。

オフィーリアは、顔をマスクで隠したこの男だけは、どうも好きになれなかった。

ソシンは元々外交官出身のしがない文官でしかない。それがいつの間にもやら超魔力を身につけて七魔将となった。常に顔を隠してマスクを被るなど、気色が悪いにもほどがある。

しかも声も女のように軽い。確か彼は中年の男のはずなのに。

「ソシン殿。どういふことだ？」

そう問うたオフィーリアの声には、どこか険があった。

「今日、貴公達を集めたのは私だ」

ソシンの言葉に、七魔将がどよめく。

「我は陛下の勅命で馳せ参じたのだ。ソシン殿に呼び出されたわけではないぞ！」

こう反論したのは第二軍の魔将、フーバーだった。彼はまだ理性的に応じた方だ。

「ふざけるなよ。なぜ新参のお前に呼び出されなくてはならない!？」

魔将の一人が激昂したが、オフィーリアは咎める気にならなかった。同じ気持を共有しただけだ。七魔将は功を競っているが、いずれも対等の関係。そこに序列はない。帝国において、彼らより上は皇帝しかいないため、名目上は皇族ですら彼らを呼びつけることなどできないのだ。

しかし、ソシンは冷静だった。

「私が陛下に奏上して貴公達に集まってもらったのだ」

「またも一触即発の空気が流れたが、それをオフィーリアが制した。」

「それは陛下が集めたというのだ。貴公が集めたわけではない。ところで、どんな用で外征に忙しい我々を呼んだのだ」

ソシンは一拍置いて話しはじめた。

「裁きの日の秘密が、ある程度分かった。陛下は、あの力を欲している」

「は、はあ？ 今さら裁きの日の秘密だと?」

「そうだ」

「一体何だ、秘密とは?」

オフィーリアはソシンに突っかかるように問いかけた。

「神でも災厄でもない。人の手によるものだということだ」

オフィーリアは呆れているのを隠さずに、ソシンに反論した。

「何を言っている。我ら七魔将が魔導部隊を率いても、そのようなことは不可能だ。確かに頭を貫かれた死体や魔法のような爆発の痕跡があつたが……どうやって三万の軍を一人残らず屠れる?」

通常、魔法戦は遠距離からの撃ち合いになる。大規模な魔法による被害は大きい、全滅と言われるような戦いでも、その場にいた者が一人残らず死ぬなどということはまずない。

実際は五割死ねば多い方なのだ。その前に隊が互解して機能しなくなり、全滅とされる。

「どこから攻撃されたかが重要だ」

「……では、ソシン殿はどこから攻撃されたと言うのだ?」

ソシンは無言で天を指さした。

「どういうことだ」

「兵士の傷。大地の損傷具合……それらから考えて、天から攻撃を受けたとしか考えられない」

「バカバカしい。まさか天の御使いが一齐に我が軍を攻撃したとでもいうのか」

オフィーリアがそう問うと、ソシンはマスクの下で僅かに笑った。

「天使達の一齐攻撃か。なるほど……さすがはオフィーリア殿。その通りです」

「な? 貴様、馬鹿にしているのか?」

「いえ。天使ではありませんが……我が帝国の兵はあの日、上空から魔法による一齐攻撃を受けたのでしよう」

「魔法攻撃? 話にならない。敵はどうやって帝国の領土の中でそれほどの大軍を運用したのだ?」

それに、敵は一兵も損失した形跡がないぞ。獣人の痕跡はもちろん、地域の民間人の目撃情報すらない」

「敵は一人……もしくは数名」

「一人だと？ あんなことは我々、七魔将ですら不可能だ。できるわけがない。ソシン殿、戯れもいい加減になされよ」

挑発的なオフィリアの口調にも、ソシンは冷静さを失わず、淡々と続けた。

「グマンの森の近くに村があっただろう。裁きの日に居を移した民間人の家族がいた」

家族？ グマンの森の近くに村があったことは知っていたが、そこまでの情報は得ていなかった。だが三万の軍勢の前に、民間人の一家族の話など取るに足らない。

「その民間人の主人はルドルフという名で呼ばれていたそうだ」

「そのルドルフがどうしたのだ？」

オフィリアが苛立ちを隠さずソシンを問い詰めた。

ルドルフは別に珍しい名前ではない。この世界では一般的な名前である。

「そのルドルフはランドル王国を追われた、ルドルフ・コートネイではなかったのかと私は考えている」

七魔将の顔つきが一斉に変わった。

「あのルドルフか？ ジェームズ・コートネイの息子の？」

「そうだ」

「なるほど。それならあり得なくもないか」

七魔将の間にざわめきが広がり、各々に話します。

「ランドル王国は我が帝国に弓を引いたということだ」

「いや、ルドルフは出奔していると聞いている」

「そう見せかけて、裏で繋がっているのかもしれないではないか」

「あのローレアの遺民の軍団だけを攻撃した理由はなんだ？」

「理由などどうでもいい、とにかくルドルフを殺す」

血気に逸った一部の七魔将を制するように、ソシンは静かに宣言した。

「ルドルフを殺してはならない。皇帝陛下は奴が手にした力を欲しているのだ」

「ソシンよ、裁きの日の秘密と力さえ手に入れば、後はどうしようも自由だろう？ 早い者勝ち

という紳士協定でどうだ？」

オフィリアの言葉に、ソシンを含む帝国最強の面々は同時に頷いた。

十年前に裁きの日を起こした張本人である転生者のレオ・コートネイは、双子の妹、マリーの誘いを受けてオルレアン高等魔導学院に入学を果たした。

世界宗教ナリア教の総本山があるバツカド国の首都、オルレアンに位置するこの学院には、二つの顔がある。

一つは、魔法学府の世界最高峰。

もう一つは、大きな宗教的影響力を持つバツカド国との関係を良好に維持するため、各国の貴族が子弟を入学させる、修道院的な側面を持つことだ。

バツカド国にとってこの学院は非常に政治的利用価値が高く、世界中の信者からの寄進で得た豊富な財源を惜しみなく投入していた。

ランドル王国の属国であるベルンの王家の血を引くマリーも、実質的に政治上の人質としてこの学院に預けられている身だ。裁きの日以降、マリーはベルン王女である母クリスティーナに引き取られ、王宮で育ててきた。父と暮らしていたレオとは離ればなれである。

さて、大賢者と称される父親、ルドルフをも凌ぐ強大な魔力を有するレオだったが、威力の制御

は大の苦手としている。さらに、あまりにも先鋭的な魔法知識が災いして、入学試験では不正解を連発。ギリギリの成績での合格となった。

オルレアン高等魔導学院のクラス分けは、入学試験の成績順にアルファベットでA、B、Rに分けられ、さらに入学時期によって数字の1から3が割り振られる。

Aが最も良い成績で、Bがその次。最も下のRはリザーブ（予備）という意味だった。

たとえば、成績優秀で早い時期に入学したマリーなら一学年のA1、最低クラスの成績で最後に受かったレオなら一学年のR3といった具合だ。

一般的に、貴族は早くから入学の準備をしているため、試験時期も早く、ほとんどが1クラスに振り分けられる。

したがって、いつの間にか「早いクラスほど格が高い」という認識が世間に広まり、上級貴族の子弟達はこぞって早期の試験を受けるようになった。

一方、身分が劣る、平民や下級貴族、コネのない者ほど、入学の準備をしていないので遅い時期の試験に滑り込む形になる。

つまり、成績においても身分的な意味でも、レオが入ったR3クラスは一番の劣等生が集まるクラスだといえるのだ。

レオとマリーがこの学校に入学したのには訳がある。

魔法犯罪者として国を追われ、隠遁生活を送る父ルドルフと、ベルンの王宮に籠る母クリステ

イーナ、そしてレオ達兄妹の家族全員が揃って暮らせるように——コートネイ家が日の当たる場所で堂々と生きられるように、世界を変えるという壮大な目的だ。

そのために、王侯貴族や魔法の名家の次世代が集まるこの学院に入って、仲間を作ること。マリーにとつては引き籠もりで、人見知りで、非常識なレオを立ち直らせるといふ意味もあったが。

こうしてレオは、四月からマリーと同じくオルレアン高等魔導学院の生徒になったのだ。



石造りの巨大な校舎の一角にレオ達のクラスはあった。教室には四十人分の木の机と椅子と教卓が並べられていた。

Aクラスも同じ構造かどうかは分からないが、四十人という生徒数は変わらないはずだ。

「ベルナー・ゴラモンドだ」

学生とは思えない屈強な肉体をした男子生徒が、人なつっこい笑みを浮かべて自己紹介をした。皆と揃いの灰色の制服を着ているが、彼は明らかに異彩を放っている。

「ゴラモンド!？」

「イグロス帝国の?」

その名前に、教室がざわめく。

明らかにやる気なさそうに爪を磨いていた担任の女教師まで、一瞬手を止めたほどだった。

それも当然だ。ゴラモンドといえ、世界に覇を唱えるイグロス帝国の皇族の名である。

実力主義のこの魔導学院において、彼のような戦士タイプの人間がRクラスというのは仕方ないが、皇子がギリギリの時期に入学する3クラスということははずだ。

この馬鹿でかい声で自己紹介する男が、ホンモノであるならば、だが。

レオとベルナーは、遺跡都市ヘラクレイオンで偶然知り合い、意気投合した仲だ。ともに「鈍色の都ミルトン」と呼ばれる遺跡の最深部まで潜り、ガーディアン・ゴレムを倒している。レオ達コートネイ家とイグロス帝国は因縁浅からぬ関係にあるが、このベルナー自身は帝国中枢部とは無縁の、裏表のない好青年であったため、レオの数少ない友人となったのだ。

「悪名高い帝国の皇子ではあるが、三十人以上も男子がいる中で、俺は末席だ。皇位継承権からは程遠いので、遠慮はいらぬ。仲良くしてくれ! まあ、いずれは這い上がって皇帝の座を継いでみせるつもりだがな、ははは!」

クラスの何人か——いや、半分ほどがベルナーに敵意のある目を向けた。イグロス帝国に遺恨がある国の出身者だろう。

しかし、残りの生徒からは好意的に受け入れられた。一部の女子などすぐに彼を気に入ってしまったようだ。

帝国の皇子が嫌らしさや卑屈さを一切見せずに、落ちこぼれクラスで堂々と名乗りをあげる。顔の造形の良さや爽やかさも理由かもしれないが、一種のカリスマ性があった。

逆に、誰からも注目を浴びなかった人物もいる。

「レオ・ライオネット。バツカドの地方貴族の子供。よろしく」

使い魔の黒猫を連れた、背の高い少年。顔つきは決して悪くないのだが、痩せていて目つきが鋭く、どこか近寄りがたい。それが他の者達から見た印象だった。

自己紹介をして席に戻ると、皆すぐに興味を失った。

隣の席に座っているネクロマンサーだと名乗った女の子が一言、「黒猫がかわいい」と褒めたくらいだ。

彼女はアンナという名前で、大きなとんがり帽子と黒いマントを制服の上から身に着けていた。

ちなみに、レオが名乗ったライオネットというのは、各国と因縁浅からぬコートネイ家の者であることを隠すための偽名である。

さて、熱意のある担任のクラスでは、この後オリエンテーションなどもあったらしいが、R3クラスの初日は自己紹介だけで終わった。

落ちこぼれのR3クラスとはいえ、さすがは名門学校。レオの目から見ても、魔法の才能がありそうな人物は少なからずいた。

やる気のない担任のミレーヌや、無口なネクロマンサーのアンナはそれに該当する。

しかし、いずれ世界の体制を変えようとするレオやマリーにとって、注目すべきは魔法の才能ではなく、その生徒の身分や社会的背景だった。ただ、その手の情報は、世情に疎いレオには分からない。後でベルナーに聞く必要があるだろう。その時間は十分にある。なぜなら……二人は寮で相部屋になってしまったからだ。



その日の夜。R3クラスの寮の一室は、爆音に包まれていた。

「ぐぐおおおおおおおおお」

実はベルナーが発したただのイビキなのだが、尋常ではない音量だった。

寮の二階にあるレオ達の部屋は、お世辞にも広いとは言えない。窓際に作業用兼学習用の机がある他は、三段のベッドと僅かな収納があるのみの簡素な作りだ。

そこで、このイビキである。

「あゝ、うるせえ」

レオは必死に耳栓のアーティファクトを作っていた。

地下遺跡でベルナーとキャンプを張った時には、彼の付き人のイザベラが気を利かせてオリジナルの消音魔法をかけてくれたようだ。

「俺は少しイビキをかくらしいけど気にしないでくれ」とはベルナーの言だが、とても気にしないでいられるレベルではなかった。

「何やってんのレオくん？」

死にそうな顔で声をかけてきたのは、相部屋になったクラスメイトのバーニーだった。

バーニーは、福耳とつぶらな瞳が特徴の少年。サルっぽい顔にも見えるが、賢さというか計算高さも同居させている。

彼は豪商の息子だが、兄が多くいて親の商売を相続できないらしい。ところが彼には魔法の才能があったため、この魔導学院に入学させられたのだ。

彼の両親には、魔法を学ぶ以外にも貴族の子弟と人脈でも作ってこい、という思惑もあったのかもしれない。

「何って、魔法的效果を持たせたアーティファクトの耳栓さ。空気の振動を相殺することで全く音を通さない。こんなもんでもないと眠れないだろ」

「ホント!? 二個作ってるってことは、ボクの分も？」

「なんでお前のも作らないといけないのさ」

レオは連れの黒猫を指さした。

「そんな……ボクの分も作ってよ。明日から体力づくりだつて聞いているよ」

やる気のない教師ミレーヌは、「魔法は体力」という持論を掲げていて、明日から生徒に走りこ

みをさせるらしい。

「頼むよ。五千ダラルでどうだい？」

だが、バーニーの懇願を、ベルナーのイビキが容赦なくかき消した。

「え？ なんだつて？ イビキがうるさくて聞こえない！」

「五千！ 五千ダラル払うから、ボクの分も作ってくれ！」

二人は声を張り上げて会話を続ける。

五千ダラルというと、おおよその物価で日本円に換算すると、約五十万円になる。バーニーとしてはかなりの金額を提示したつもりなのだろう。

しかし、レオは常に最高の魔法素材でアーティファクトを作るので、五千ダラルで材料を買い揃えたとすると、足が出てしまう。

「うお、五千ダラル!? どこだ五千ダラル！」

五千ダラルという言葉に反応して、突然ベルナーが跳ね起きた。

ようやくイビキが鳴り止んだ。

「もう耳栓はいらないんじゃないか？ バーニー」

「またすぐに必要になるだろうから、頼むよ」

バーニーがあまりにも必死に頼むので、レオは彼にも耳栓を作ってやることにした。

「いいぜ。作ってやるよ。余った材料で作るから、金はいらない」

「おお、ありがとう！ でも材料費は払うよ」

「いいからいいから」

二人の会話を聞いてもベルナーに悪びれる様子はない。

「いや、そんなに俺のイビキうるさい？ ワリーワリー」

レオはベルナーが再び寝てイビキをかかないように、作業をしながらクラスメイトの出自や立場などを聞き出すことにした。

「そんな細かいことは気にせずに、どんな奴とても友達になればいいじゃんかよ」

一通り話し終え、ベルナーはそう締めくくった。

少し遠回りかもしれないが、当面は「誰とても友だちになればいい」という彼の言葉に従うのが正解かもしれない。ここには各国の未来の為政者も集まっているのだ。コートネイ家が再び日の当たる場所で暮らすという目的のマイナスにはならないだろう。

そうこうしているうちに、三人分の耳栓が完成した。

耳栓はほとんど装着感がないのに、完全に音を遮断する。

バーニーは驚いた顔で、繰り返し耳栓を着けたり取り外したりした。

「これ凄いね。レオくんはアルケミストを目指しているのかい？ もしアルケミストになったら、これをウチの商品として売らせてくれよ。大ヒット間違いなしだ」

「いや別にアルケミストを目指しているわけじゃないよ」

そう。彼は「目指している」のではなく、実際はすでにアルケミストとしてある程度名を馳せているのだ。

「そうなの？ これだけ才能があるんだから、アーティファクト作りを学んでいけば、いずれゴールデンのような高名アルケミストになれるかもしれないよ。絶対アルケミストになるべきだよ！」

どうやら豪商の息子であるバーニーは、早々にレオの才能の一端を見抜いてしまったらしい。

「しかし、おかしいなあ。これほどのアーティファクトを作れるなら、入学試験の成績だっていいはずだよ。レオくんの成績は実技と筆記の合計で48点だもんなあ」

「ハハハ！」

それを聞いて、なんとなく事情を察しているベルナーが笑う。

レオは無言で三段ベッドの一番上に寝転んだ。

——そして試験の日に起きたことを思い出していた。



「アイリーン先生が推薦したレオ君か？」

五人の試験官のうち、もつとも偉そうな試験官がレオに聞く。

名前は分からないが、精悍な顔つきの若い男だ。

アイリーン先生こと、ソフィアもその隣で微笑ほほえんでいた。

彼女は帝国に滅ぼされた国の王女で、アイリーンは正体を隠すための偽名だ。レオはかつて、彼女が率いていた反乱軍を資金的に支援していたことがある。

「はい」

試験場は屋外の広場で、周囲には不可視の魔法障壁が巡らされている。中心部分には、魔法の標となる鋼鉄の鎧が、人の高さの台に載せて設置されていた。

鎧の胸元に二重の丸が書いてある。おそらく、これに当てるということだろう。

「私は君の試験において責任者を務めるハートリーだ。さすがアイリーン先生の推薦だな」

そう言って、ハートリーはソフィア——ここではアイリーン先生に視線を向けた。

「まあ、どうということですか？」

アイリーンは微笑みながら首を傾げた。

「この会場に入ったら即刻弾かれる者もいるが、レオ君の魔力はとてつもなく大きい」

なるほどね、とレオは直感的に気がついた。

このハートリーという試験官は、どうもアイリーンに少なからぬ好意を抱いているらしい。

そのアイリーンが推薦した自分に関心を持っているのだ。

どうも自分は蚊帳かやの外のようなではあるが、都合が悪いということはない。

「ありがとうございます」

レオは試験官達に向かって一礼した。

「うむ」

魔法使いは安易に自らの手札てふたを晒さらさないために、平時は魔力を隠すのが「普通」である。

だが、試験会場では話は別。全力で魔力を誇示こししないと、先ほどハートリーが言ったように、魔力不足で退けられることもある。

ところが、レオは「普通」の状態だった。

意識して魔力を全て見せようとしているわけではないし、逆に魔力を全て消そうともしていない。

「普通」にしていただけなのに、大きな魔力の持ち主だと思われたのだ。

「ハハハ。君の魔力は底が知れないな」

ハートリーは笑いながら言った。

相手の隠された魔力を読もうとするのも、魔法使いにとっては日常的だ。しかし、ハートリーがレオの隠された魔力をすべて捉えられたかどうかは疑わしい。

蟻の大きさしかない者が、目の前の巨像の大きさに気がついて笑えるだろうか。

ハートリーはレオが今全力で魔力を誇示していると思ったのかもしれない。

「さて、もう実技試験の内容は分かっていると思う」

「あ、はい。あの鎧の的に魔法を当てれば良いのでしょうか？」

「そうだ。自分の得意な攻撃魔法で構わん。出来る限り、的の中心を狙って放て」

「分かりました」

簡単な試験内容で、レオは油断していた。

本当なら彼は、全力で魔法の威力を抑えなくてはならなかったのだ。

指向性の高い魔法を適当に放ってしまう。

「ファイアアロー」

その瞬間、レオの掌から「矢」と呼ぶにはあまりに巨大な炎の奔流が現れ、鋼鉄の鎧を地面ごと削りとった。

辛うじて試験官五人があらかじめ張っていた魔法障壁に亀裂を入れるに留まったが、もしアイリーンが魔力を注いでいなかったら、確実に障壁を破壊していたことだろう。

「やべ、ミスった」

レオはミスったと言ったが、そもそも彼は魔法の威力の調整が苦手で、いつも必要以上の威力でぶっ放してしまう。

方向の調整は完璧で、的の中心を捉えていたはずだが、その的自体も無くなっている。

「お前！ 誰が全力で破壊しろと言った!? これがコントロールの試験だということも分からないのか！」

突然大威力の魔法を放たれて驚いたハートリーが、大声で怒鳴る。

「ハートリー先生。一応的には当たっているようですから……」

アイリーンがなだめるものの、レオに対するハートリーの態度は好意的なものから百八十度変わっていた。

ひよっとしたらハートリーは、彼女のことでもレオが脅威になると思ったのかもしれない。

「いくらコントロールが苦手だからといって、こんな危険な手段で誤魔化すなど言語道断だぞ！」

「す、すみません」

「もういい！ 次の試験はまさしく威力の試験なのだが、その実力は分かった。お前は筆記試験に行つて構わん」

レオは逃げるようにして、破壊された実技試験の会場を後にした。

「まあ筆記ではあんなことにはならないだろう」

レオは試験用紙を裏返しにして開始の合図を待っていた。

彼とともに試験を受けるスラム出身の女の子、ウエステも緊張の面持ちだ。

「試験開始！」

試験官の合図とともに、皆一斉に用紙を表にする。

パッと見てレオが思ったことは、こうだった。

「過去問もそうだったけど、簡単すぎるな。これならウエステも受かるかもしれないぞ」

自分のことよりも他人の心配をしたレオだったが、それが誤りだったと気づくのは、合格発表ま

で待たねばならない。

先鋭すぎる魔法理論によって導き出されたレオの解答は、世間的にも学院的にも、全く模範的ではなかった。

だが学院には、その魔法理論に何も感じない教師ばかりが集まっているわけではない。

たまたまレオの答案を見た学院長のトルドウスは、「ここに書かれた魔法理論は三十年か四十年後には正しいものとして扱われるかもしれない」と漏らしたらしいことが、後日アイリーンを通してレオにも伝わった。

ともかく、入学後、レオの成績が貼りだされた。

実技 威力 48点

調整 0点

筆記 判断不能

合計 48/300点

レオの筆記の結果には点数ではなく判断不能という文字が書かれていたが、合計点を見れば0点ということらしかった。



学院生活が始まって二日目、教室は朝から騒がしかった。

「アンタがいつまで言うまで校庭を走ってこいだって？」

ベルナーが立ち上がって、馬鹿でかい声で担任に食ってかかっている。

「アンタじゃなくて先生だろ。侵略国家の帝宮に帰ってもいいぞ？」

「ぐっ……先生。ここは魔法の学校じゃないのか？」

「ああ。世界最高峰の魔法学校さ。ここより優れた魔法教育機関は、お前の国の軍学校くらいじゃないか？ もっとも、あそこは魔法を人殺しのためだけに学ぶだけだな」

「その魔法学校の校庭を、どうして走らなくちゃならない？」

担任のミレーヌは、落ちこぼれクラスの担任らしく、今日も授業そっちのけで爪の手入れに精を出していた。

美人と言えるのだろうか、赤青紫緑のカラフルな髪色、長すぎる付けまつげは、とにかくケバかった。年の頃は二十代の後半から三十になったぐらいに見える。

「私はお前らの魔法の力を育てるためにいるわけじゃない」

ミレーヌはベルナーの方を見ずに、面倒くさそうに言った。

「はあ？ じゃあなんのためにいるんだよ」

「落ちこぼれのお前らを早く脱落させてやるためだ」

「な、なんだと!？」

「RクラスのRって意味分かってるか？ 予備って意味だ。つまりお前らは魔法を学ぶのに向いてないんだよ。才能がない。だから早くやめさせてやろうってわけさ」

教師にあるまじきこの言葉には、いつもうるさいベルナーでさえ、しばし絶句した。

「……教師に俺達をやめさせる権利なんかあるのか？」

「ない」

レオはてっきりその権限があるのかと思っていたが、違ったようだ。

「この学院にはお偉方のお坊ちゃんお嬢ちゃんも入ってるからね。あまり強引なこととはできない。

だから自分からやめやすいようにしてやる。お前らは才能がないし、向いてないってことを徹底的に教えてやるからな」

「でもよ、校庭を走るとなんの関係がある？ それじゃ魔法に向いてるかどうかなんて、分から

ないだろ」

ベルナーはやつと食い下がるポイントを見つけたらしい。

「あ、私には生徒をやめさせる権限はないが、授業内容を好きに決める権限はある」

ミレーヌは楽しそうに笑った。

「そうだな……お前はご自慢の鎧と剣を着けて走れ。体力がありそうだからな」

ピカピカに磨かれた爪が、ベルナーの魔剣ティルフィングとネメアの鎧を指し示した。

「なんだって？ くっそ重い鎧と剣を装備して走り続けるってか？」

「そうだ。お前はそれで戦うんだろ？ 訓練の時に外して楽をして、生死を懸けた実戦の時に動けなかつたらどーすんだよ」

——そういうことか。

クラス中が不満の渦に吞まれたが、レオはこの教師の言葉に納得するものがあつたため、静観していた。



校庭を走るレオの肩には黒猫が乗っていた。

見た目は完全な猫だが、中の魂は彼が長いこと一緒に暮らしている猫型獣人のルナだ。

魂を入れ替えるアーティファクトである首輪の中心には、炎のように赤く揺らめきながら輝きを放つ金属が使われていた。レオ達が鈍色の都ミルトンで手に入れた、緋緋色金である。

レオを含むクラスメイト達は、初日の授業からずっと走らされていた。

落ちこぼれクラスの担任である、ミレーヌの指示だ。

「にやにやにや。にやにや（学校って走ってばっかりいるんだね。人間には大変そう）」

「分かってるんだったら重いから下りてくれっ、はあっはあっ」

レオは体操服を汗で濡らし、肩で息をしている。

一度、衆をするためにアーティファクト天馬の革靴を使って走ったのだが、ミレーヌに見咎められて、それ以来は普通に走っていた。

しかし、彼はまだマシな方だ。商人の息子のバーニーやネクロマンサーのアンナなどは体力がないので、いつ倒れてもおかしくない状態だった。

「べるにゃにゃ。にゃーにゃ（ベルナーは鎧を着て走ってるよ。あれと比べたらマシでしょ）」

「……あの脳筋と一緒にするなよっ」

担任のミレーヌは、目を追うごとに周回数ノルマを増やしていった。

これには皆不平をこぼしたが、せっかく学院に入学したのに脱落したくないと、毎日必死で走っている。

その結果ほとんどのクラスメイトが、放課後になる前に、持久走のノルマを終わらせることが出来るようになっていた。

ただ一人を除いて……

「おい。レオ。またアンナが倒れたぜ」

魔剣と鎧をガチャガチャと鳴らしながら、ベルナーがレオに並走した。

「みただな。アンナは何周ぐらい残している？」

「分かんねーけど、また真っ暗になるまで終わらないのは間違いないだろうな」

走り込みはノルマを達成するまで一日中続くが、ノルマを達成していなくても、放課後になればやめて帰ってしまう者がほとんどだった。それについてはミレーヌも文句は言わない。しかし、アンナだけは、律儀にノルマを達成しようとして、日々遅くまで走っていた。

ベルナーとレオはアンナの側に駆け寄る。

「大丈夫か？」

ベルナーが倒れたアンナに肩を貸そうとすると、背後からミレーヌの怒号が飛んだ。

「手伝うな！ 一人で走らせろ！」

ベルナーはそれを無視して手を伸ばす。

「さあ。立てよ」

「ベルナー。お前のやっつてることは甘やかした。いざって時に困るのはアンナなんだぞ！」

「うるせえ！」

このところ、いつも行われているやり取りだった。

アンナが膝ひざに手をつけて、ヨロヨロと立ち上がる。

「……大丈夫……私は大丈夫」

とても大丈夫そうには見えない。転んだ際に擦すりむいたのだろうか、膝から血も流れていた。レオはそっと小瓶びんを差し出した。



「ポーションだ。使えよ」

「でも……」

アンナは遠慮して受け取ろうとしなかったが、レオは強引に彼女の手にポーションをねじ込んだ。

「いざって時にポーション用意してない奴もいないだろ？」

「……あ、ありがと……」

どうやらミレーヌは、ポーションの使用については文句を言わないようだ。

「あのヒスババアはレオのポーションは何も言わないのに、なんで俺が手を差し伸べると文句言うのかね」

「別に先生は俺達をしごきたくて走らせてるってわけじゃないさ」

「随分かばうんだな？ 噂じゃ学院長の訓示の日までに人を減らしたいって話だぜ」

オルレアン高等魔導学院では、入学して一カ月後に学院長の訓示がある。レオやベルナーは知らなかったが、それを聞くことができはじめて新入生と認められる向きがあるのだ。

実際にその式典は「入学式」と命名されている。

毎年のクラスでも、入学式が開かれる前かなりの人数がやめることになるらしい。それを乗り越えれば、以降はやめる生徒は少なくなる。

「アンナも入学式まで頑張ろうぜ」

そう言い残して、ベルナーは再びガチャガチャと鎧の音を立てながら走り始めた。

レオも照れくさそうにアンナに笑いかけてから、ベルナーの後を追った。



その日の夜、バーニーは寮の部屋でレオ達に泣き言を漏らした。彼の足の裏には痛々しい血豆ができています。

「毎日、毎日走らされて……もうやめたいよ」

「でもよ。体力がなさそうなアンナですら脱落しないで頑張っているのに、お前が最初になるつもりか？ そんなことねえよな!? バーニー、お前なら乗り越えられるぜ！」

ベルナーは良く言えば男らしい、悪く言えば脳筋そのものの理屈で、バーニーを思いとどまらせようと説得する。

ベルナーの言いたいことは、レオにも分かった。

アンナはフラフラどころか時たま倒れながらも、放課後まで走っている。そんな彼女を差し置いて、早々と諦めてしまつては男として格好がつかない。

「あ、ありがとう……でも……僕は魔法を学びに来たんだよ。なんの意味もないじゃないか。あの教師、おかしいんじゃないか？」

「ミレーヌ先生の授業も、意味がないわけじゃないよ」

そう言つて、レオは手製のポーションをバーニーに差し出す。

「どこがだよ！ 魔法なんて全く教えてくれずに、走らせてるだけじゃないか。あれは怠慢だよ！」
納得がいかないバーニーはいきり立つが、魔法には体力も必要だということを、彼はまだ知らない。

正確には、魔力を使うことによつて体力も消耗するのだ。

平時であれば意識しないレベルの消耗だが、特に魔物との戦闘や軍隊同士の戦争では、多数の相手と対峙する場合が多い。目の前の敵を倒しても次々と新しい敵が現れるし、移動や回避のために肉体を酷使することもあるだろう。

実戦では、体力を消耗すればそれだけ死に近づくということだ。いくら魔力があつても体力が尽きて息切れしているところを襲われたら、対応できない。

「考えてもみるよ、バーニー。魔物の集団との戦闘で息が上がってしまったらどうするつもりだ？ そんな状態じゃ魔法は使えないだろ？ 魔物は息を整えるまで待つてくれないぞ」

「それは……」

バーニーは言葉を詰まらせる。レオの話はもつともだと思つたようだ。

実際、ミレーヌがそこまで考えて走らせているのかは怪しかつたが、レオは魔法戦における体力の必要性も感じていたので、一日中の走り込みも受け入れていた。

「本当にレオのポーションはよく効くな。血豆がもう治つたよ」

バーニーはようやく笑顔を見せた。

それは、もう少し頑張るという意思表示だろう。

「よかったな」

まだ期間は短い、学校での共同生活はレオにも変化をもたらした。

学校に入る前の約十年間、レオは自宅の地下室で研究に明け暮れ、隠者のような生活を送っていたため、基本的に他人と接するのが苦手である。しかし、ベルナーやバーニーといった気の置けない仲間と過ごすうちに、幼少時代——あるいは転生前、桐生レオだった頃の快活さを取り戻しつつある。ぶつきら棒は相変わらずだったが、もう人前で不安に駆られることは少なくなっていた。

「それにしても、レオの黒猫は可愛いね。まるで人間の言葉が分かるみたいだ」

バーニーがそう言うと、ベルナーもニヤけ面でそれに参加した。

「まるで恋人みたいだよな。走ってる時でさえ肩に載せてるんだもの。くっくっく」

ベルナーは一目見た時からこの黒猫の魂がルナであると直感していた。

彼は獣人姿のルナとは面識があるし、この猫の首輪に、遺跡で苦労して手に入れた緋緋色金ヒイロカネが使われていることを知っている。

その希少な素材をただの猫につけることはないと思って、ピンときたのだ。

レオもさすがに誤魔化しきれないと思って、ベルナーにはルナだと白状してしまった。

それでこうして、からかわれるハメになったのだ。

「魔法生物や動物を使役しえきする魔法使いは結構いる。俺のルナもそれさ。けど、そう言うベルナー様には、休み時間の度にBクラスから従者が甲斐かひ甲斐かひしく世話を焼きに来ているけどな？」

「ぐっ」

レオに痛いところを突かれて、ベルナーはそれっきり口を閉ざした。

走りっぱなしのR3クラスにも休み時間はある。

ほとんどのクラスメイトが大汗をかいて校庭で大の字になって寝てしまったため、その光景は上位クラスの者達の笑いものになっていた。

そんな中、B3クラスのイザベラだけは、休み時間の度にベルナーの汗を拭きに来ている。

貴族とその従者が揃って学院に入学している例は少なくないが、クラスが離れてもここここまで熱心に主人の面倒を見ている従者は、イザベラしかない。

最初はその様子を上位クラスの生徒や帝国を毛嫌いする生徒が馬鹿にしていたが、度が過ぎれば……ということもあるらしい。いつの間にかベルナーに尽くすイザベラの姿は美談として語られるようになっていた。

彼らを馬鹿にする生徒は沈黙して、今では好意的にからかう者が大半だ。



ミレーヌの授業は二週間経っても変わらなかった。

毎日毎日、走っているだけで一切の魔法の講義は行われていない。

一日の最低周回ノルマだけが、日を追うごとに増えていく。

予想通り、持久走が原因で学校をやめようとするクラスメイトが数名出たが、その度にベルナーは説得して回った。

それがベルナーに好意的な生徒相手に限った話ならまだ分かるのだが、帝国を敵視する国出身の者であってもお構いなしである。

「もうやめちまうのかよ！ あと一日だけ耐えようぜ！ な!?」

レオにはそんなベルナーの姿が、遠い記憶の中にある無駄に熱いスポーツ解説者とダブって見えた。だが彼の激励は不思議と効果があった。

「帝国のくそ皇子なんかに言われたくねえよ！」

ベルナーを帝国のくそ皇子と言ったのは、アルベルト・ネリという級友だった。

R3クラスにも帝国と敵対している国の貴族の子弟はいて、そのような者達は帝国を憎んでいる。だが、彼らもベルナーに発破はつぱをかけられると、不思議と力を出した。

持久走のノルマを終わらせて校庭の芝に腰を下ろしているレオに、ルナが猫語で話しかけてきた。

「アルにゃん、にゃべるにゃーん（アルベルトは、なんだかんだベルナーと仲いいよね）」

「アルベルトは、ベルナーが帝国で鼻つまみにされていることを知ったのかもしれない。帝国の皇子だつてことに一番拘たわつてた奴だから、かえって親近感を覚えたのかもな」

考えてみれば、レオもルナも帝国とは因縁が深い。

当のベルナーは、相手にうざがられながらも果敢かかんに踏み込んでいく。とても世界最大の版図はんとを持つ国の皇子の態度とは思えなかったが、逆にそれがよかつたのだろうか。早くも、ベルナーの周りにはクラスメイトが集まるようになっていた。

その余波は、ベルナーとつるんでいるレオも受けることになる。

見ると、ジャクリーヌという女生徒が、足を少し引きずりながら女子寮の方に帰ろうとしていた。彼女はオルレアンに比較的近い農村の出身だ。彼女には魔法の才能があったので、村人達がお金を出しあってこの学院に送ってくれることになったらしい。

ベルナーは、すかさずその女生徒に声をかける。

「ジャクリーヌ、足どうした？」

「……ちよつと捻ひねっちゃつて」

「レオ。ポーションを出してくれ」

ベルナーは一切遠慮せずにレオにポーションを要求する。

「ちよ、ちよつとベルナーくん。レオくんのポーションは凄く高いでしょ？」

レオの手製ポーションは、ジャクリーヌの村のマジックアイテム屋には売ってすらいらないハイ・

ポジションだ。彼女が遠慮するのは自然な反応である。

「はあ？ 何言ってるんだ。タダだよ、タダ。こいつは全部自分で作ってるんだ。俺達の相部屋の半分はレオのアーティファクトやマジックアイテム作成の素材で埋まってるんだぜ」

レオの返事も待たず、ベルナーは勝手に答えていた。

オルレアンは大都市だけあって、マジックアイテムの素材屋の品揃えが充実している。レオはそこで手に入れた素材を次々運び込むので、彼らの部屋は早くもレオの私物で溢れかえっていた。

「でも、タダでは貰えないわ。材料代だっつかかっているでしょうし、レオくんだって走った後の疲労回復用に使っているんですよ？」

ジャクリーヌは走ってばかりの授業にも決して弱音を吐かなかった。レオは彼女が文句を言うのを一度も聞いたことがない。

農村の出ということだったが、その立ち居振る舞いにはどこか気品を感じる。

R3クラスは走ってばかりいるので制服をほとんど着ていないが、登下校時の彼女の制服姿を見れば、誰もが高貴の出だと思っだろう。

主にベルナーに振り回される形だったとはいえ、レオはクラスメイトになら誰でも惜しみなくポジションを配っていた。それでもレオに気を遣って断ったジャクリーヌの態度に、レオはほのかな好感を抱いた。

「困ったときは助けあおうぜ」

そう言っ、レオは自分の手でポジションを差し出す。

また断られるかと思っ、ジャクリーヌは素直に受け取って、お礼を言っ。

「……困ったときは助けあおう、か。そうね。ありがとうレオくん」

こうしてレオも、ベルナーを通して仲の良いクラスメイトを増やしていくのだった。



オルレアン高等魔導学院は基本的に全寮制だ。

必ずしも入学時の年齢が決まっっているわけではないので生徒達の年齢は様々だが、総じて若い男女が寮暮らしをすることには変わりない。

「おい！ レオ、バーニー！」

消灯時間後にベルナーがレオとバーニーに話しかけた。

高性能耳栓アーティファクトをしているレオ達にはベルナーの声が聞こえただけではないが、体を揺さぶられて、彼が呼びかけているのが分かった。

レオとバーニーは、だるそうに耳栓を外した。

「なんだよ、ベルナー……」

バーニーは面倒そうな顔をしている。もちろんレオもだ。